栄養学雑誌70巻の歩みとこれから

—「栄養学雑誌創刊70巻記念シンポジウム」から—

上西 一弘^{*1,*2}, 伊達ちぐさ^{*3,*4}

^{*1}女子栄養大学栄養生理学研究室 ^{*2}編集担当理事・栄養学雑誌副編集委員長 ^{*3}兵庫県立大学環境人間学部

^{*4}元栄養学雑誌編集委員長

はじめに

栄養学雑誌70巻記念特別号の発刊にあたり、第59回日本栄養改善学会学術総会（2012年9月13日、名古屋国際会議場）におけるシンポジウム、「栄養学雑誌創刊70巻記念シンポジウム」—栄養実践活動を支える科学的根拠の発信—の概要を報告する。なお、本稿は講演集の要旨等をもとに作成したが、「2. 栄養学雑誌の歴史的視点から」については、栄養学雑誌の歩みを振り返るために、当時の発表資料を更新し、第70巻までのデータを示した。

シンポジウムの内容

1. 「イントロダクション」

特定非営利活動法人日本栄養改善学会理事長

木戸 康博

2. 「栄養学雑誌の歴史的視点から」

兵庫県立大学環境人間学部

伊達 ちぐさ

3. 「本を、難しくするもの」

宮城大学看護学部

中塚 晴夫

4. 「栄養学教育の視点から」

名古屋経済大学大学院人間生活科学研究科

鈴木 公

5. 「科学的エビデンスと英文ジャーナル」

関西大学化学生命工学部, Journal of Nutritional

Science and Vitaminology 編集委員長

吉田 宗弘

6. 「まとめ：栄養学雑誌の存在意義と目指すもの」

女子栄養大学栄養生理学研究室, 日本栄養改善学会

編集担当理事・栄養学雑誌副編集委員長

上西 一弘

1. イントロダクション（木戸 康博）

栄養学雑誌は、1941年に創刊され、本年（2012年）第70巻を刊行することとなる。創刊号の巻頭言で国民栄養部研究会長杉本好一先生が、『…此の秋に當つて我等は絶えず調査研究し來つた成果を實生活に移し行くことは勿論、栄養學の一層の發達普及に専念せねばならぬ責務を痛感するものである。仍て厚生科學研究所國民營養部内に、國民營養部研究會を設け、共の一事業として曩に公けにせられた「營養學文献抄」を更に一步躍進せしめ内容の充實を圖り「營養學雑誌」と改め之を續刊行し、此の重大時局下に國民資質向上と生活安定の上に最喫緊事たる營養問題の研究並に共の應用實踐に指針を與へ之が進歩徹底に貢獻し所期の目的達成に邁進せん固い覺悟である。』（栄養学雑誌第1巻第1号、1941年より）と、栄養学雑誌の意義と覚悟を記されている。私たちもその考えを踏襲し、栄養実践活動を行い得られた調査研究成果を、学術総会や支部総会ならびに栄養学雑誌に発表して、科学的根拠の共有に務めてきた。栄養学雑誌は、私たちの共有の財産であり、益々その果たすべき役割は大きくなっている。

日本栄養改善学会は、国民の健康増進に寄与することを目的とし、そのために、科学的根拠に基づく栄養実践活動を行うこと、栄養学と健康科学の振興を図ること、を定款に謳っている。これを実践するためには、国内外を問わず、広く栄養学と健康科学に関する科学的根拠を求め、これに基づく栄養実践活動を行う必要がある。栄養実践活動を行い得られた調査研究成果は、学術総会や支部総会ならびに栄養学雑誌に発表して、科学的根拠の共有に務める必要がある。

連絡先：上西一弘 〒350-0288 埼玉県坂戸市千代田3-9-21 女子栄養大学栄養生理学研究室
電話 049-284-3895 FAX 049-284-3895 E-mail uenishi@eiyo.ac.jp

2. 栄養学雑誌の歴史的視点から（伊達 ちぐさ）

1) 栄養学雑誌刊行の歴史（表1）

1941年，長期臨戦態勢下のわが国においては，食料確保の問題が重要視されるようになったことから，厚生科学研究所国民栄養部（現独立行政法人国立健康・栄養研究所）内に国民栄養部研究会を設けて，その事業のひとつとして発行されていた「栄養学文献抄」の内容の充実を図り，名称を「栄養学雑誌」と改めて続刊行されたものが，第1巻である（図1）。創刊の巻頭言は，当時の国民栄養部研究会長の杉本好一先生によって執筆され『此の重大時局下に国民資質向上と生活安定の上に最喫緊事たる栄養問題の研究並に其の応用実践に指針を與へ之が進歩徹底に貢献し所期の目的達成に邁進せん固い覚悟である』と強い決意が述べられた。

第二次世界大戦にわが国が敗戦した1945年には，終戦前に国民栄養部が罹災したことにより栄養学雑誌は発行不能の状態になっていたが，1946年12月には第5巻1・

2号が，1947年4月には3号が刊行された。第5巻からは国民栄養部研究会は編集のみを担当し，その他の実務は第一出版株式会社が行うことになった。1947年の国立栄養研究所の設立と共に国民栄養部研究会は発展的解消を行い，国民栄養振興会として新たに発足した。そのため，同年9月に刊行された4号から，編集は国民栄養振興会が行うようになった。

日本栄養改善学会が栄養学雑誌の発行に関わったのは1965年1月からで，第23巻から国民栄養振興会と連名で発行するようになった。その後，1998年第56巻2号より日本栄養改善学会が単独で発行し，2012年2月に70巻が刊行された。

2) 栄養学雑誌に掲載された論文内容の変遷

栄養学雑誌第1巻～第70巻（但し，4巻1号および2号は除く）に掲載された論文の内訳を表2に示す。

これらの論文を5つの時代区分（表3）により，各期の論文に占める種類別，研究方法別，研究対象別割合を算出し，表4及び図2にまとめた。研究方法別では，実験研究が減少して，実態調査が増加し，研究対象では動

表1 栄養学雑誌刊行の歴史

1941年	国民健康栄養部研究会が「栄養学文献抄」を基にして「栄養学雑誌」を創刊
1946年	5巻1～2号を刊行（編集作業以外は第一出版が担当）
1947年	国立栄養研究所の設立に伴い，5巻4号から国民栄養振興会が編集を担当
1965年	23巻から，国民栄養振興会と日本栄養改善学会が連名で発行
1998年	56巻2号から，日本栄養改善学会が単独で発行

表2 栄養学雑誌1巻1号～70巻6号 掲載論文の種類の内訳

	掲載論文数	総数に占める割合（%）
総数	2,296編	100
総説	212編	9
原著・報文	1,209編	53
研究ノート	237編	10
資料	343編	15
調査	229編	10
事例・実践報告等	34編	1.5
論議・解説	32編	1.5
その他	12編	—

表3 栄養学雑誌の刊行時期別時代区分と掲載論文数

	時代区分	巻号	編数
I 期	国民栄養部研究会時代	1～4巻	61編
II 期	第2次大戦後の国民栄養振興会時代	5～22巻	615編
III 期	国民栄養振興会と日本栄養改善学会が連名で発行した時代の前期（1979年以前）	23～37巻	551編
IV 期	同上 後期（1980年以降）	38～55巻	570編
V 期	日本栄養改善学会が単独で発行した時代	56～70巻	499編

図1 「栄養学雑誌」創刊号の表紙

表4 栄養学雑誌の刊行時期別 論文の種類, 研究方法, 研究の対象

(%)

刊行 時期	論文の種類						研究方法			研究の対象			
	総説	原著 報文	研究 ノート ^{*1}	資料	調査	その他	実験 研究 ^{*2}	実態 調査 ^{*3}	その他	ヒト	動物	食物	その他
I 期	15	36	0	34	5	10	51	25	25	42	5	33	20
II 期	2	80	1	8	7	2	64	27	9	42	20	15	23
III 期	2	46	4	12	33	3	41	41	18	47	22	12	19
IV 期	17	48	20	14	1	1	34	44	22	55	9	10	26
V 期	16	34	20	24	0	6	43	40	17	68	7	8	17

^{*1}: 短報を含む, ^{*2}: ヒト・動物・食物を含む, ^{*3}: 食事・身体状況・生活習慣調査等を含む

図2 原著及び報文の掲載数及び割合の推移 (1~70巻)

物と食物共に減少し, ヒトが増加している。

3. 本を、難しくするもの (中塚 晴夫)

自分が書く立場になってみると, 解りにくい説明は, 多くの場合, 対象となる事柄が難しいからではなく, 書き方が悪いのだと気がついた。そこで大学の教科書を見直すと, 簡単なことを分かりにくく書いているものも多く, 推敲を重ねれば, 解り易くすることはそう難しくはないと思うようになった。さらに, 解りにくい本が難しいことを書いているとは限らず, 中には書いている人が自分自身でも解らずに書いている場合等, 本にも品質があることも解ってきた。

解りにくいことは, 高いレベルを示すことではなく, 解り易い説明は, 著者の学問レベルの高さを示すものである。また, 言葉を文学の対象ではなく, 情報の伝達手段と割り切り, 用件を伝える文章があることを, 木下是雄先生は名著「理科系の作文技術」で示された。

それでは, 何が本を解り難くするかである。まず, 簡単なことを解り難くして, 権威づける等は言語道断だが, これが案外多い。あるいは, 受身表現が客観的な表現であるという, 都市伝説のようなものがある。これは栄養系の論文を書かれる人なら一度は聞いたことがあると思う。私も学生時代, レポートの添削を受けて, 受身で書けと指示された記憶がある。そのほか, 最も中心的な事柄を書かないで, 最も重要な文献だけ示さないなど,

著者の文章を書く姿勢に問題がある本は、いくらでも見つかる。

次に、大学レベルの教科書になると、最先端の科学に触れるものがある。これを読んでいて、どうしても腑に落ちない記述に出会うときがある。著者がよく理解していない場合も多いが、研究が十分行われていない場合がある。この場合、「この原因は、研究が進んでおらず分かっていない」と書けば良いのだが、そう書けない人が多い。その分野の研究論文が見つからないときに、この事柄は分かっていないと言い切ることは難しい。それがあると言い逃れができないからで、曖昧な表現となりやすい。

4. 栄養学教育の視点から (鈴木 公)

21世紀における栄養学教育には、「人間栄養学：Human Nutrition」が求められている。今後、管理栄養士は、人間栄養学の専門職として、保健、医療、福祉、介護といった場面でますます活躍していかなければならない。

専門職として正しい判断を行うためには、疫学の知識が不可欠となる。なかでも、栄養と食に関する事柄について検討するものは「栄養疫学」と呼ばれる。しかし、疫学研究者の多くは医師であり、管理栄養士養成施設の教員で、栄養疫学を専門とする教員は非常に少ない。そのため、疫学についての基礎知識を身につけた管理栄養士はいまだ少ないのが現状ではないだろうか。

栄養学でも、「EBN (Evidence-Based Nutrition, 根拠に基づく栄養学)」という考え方が注目されるようになってきた。食事摂取基準は、この EBN の考えに基づいて策定されている。対象者に対して効果的な栄養マネジメントを行うためには、栄養疫学および EBN に関する基礎知識を持ち、食事摂取基準について正しく理解する必要がある。

さらに、管理栄養士は栄養実践活動を行うとともに、科学者として科学的根拠を発信していくことが望まれる。日々の栄養実践活動の中で調査・研究を行い、論文・学会発表を通して発信できる人材の養成が必要とされている。栄養指導、栄養教育、栄養管理、公衆栄養活動、栄養疫学等の人間栄養学のエビデンスは、まだまだ不十分な現状である。世界へ科学的根拠を発信するために、英語での論文執筆・学会発表能力を修得し、世界において人間栄養学のエビデンスを蓄積・共有していくことが求められている。

近年、管理栄養士の職域は広がっている。新しい時代の様々な食と健康の問題に対して、科学的根拠に基づい

た栄養実践活動あるいは栄養マネジメントが実践できる管理栄養士の育成が急務である。そのためには、今後、人、食、栄養、健康に関する情報を、栄養疫学および EBN に基づき、総合的に分析、評価できる実践能力を持ち、人間栄養学の科学的根拠の発信・普及を通じて生活習慣病の予防や治療に貢献できる人材の養成に尽力することが、我々栄養学教育に携わる者の使命であると考えらる。

なお、鈴木先生からは、日本栄養改善学会監修、栄養学雑誌編集委員会編集の「初めての栄養学研究論文一人には聞けない要点とコツ」についての紹介もあった。

5. 科学的エビデンスと英文ジャーナル

(吉田 宗弘)

科学的エビデンスには客観性が要求される。すなわち、過去の事例の中で第三者によって評価されたものが価値の高いエビデンスとなる。一般に、エビデンスとしての価値は、①部署内での非公開の報告<②第三者の評価を経ていない公開の報告<③第三者の評価を経た報告、の順に大きくなる。①には部署内のみで閲覧可能な文書など、②には審査のない報告書や学内紀要、さらにインターネット上の情報など、そして③には審査付きの学会誌などが該当する。③も、形式的な審査しか行われていない小規模な学会誌など<複数の審査員によって評価される全国規模の学会誌<英文で公表される国際雑誌の、順にエビデンスとしての価値が大きくなる。国際雑誌のエビデンスとしての価値が大きいのは、それが世界中の人間の目にふれることを意識して執筆され、かつ掲載に至るまでの審査も厳しいからである。

栄養実践活動のエビデンスとなるのは栄養学に関する科学論文である。日本には栄養に関する学会は複数存在しており、それぞれ和文の学会誌を刊行している。国内で行われた栄養実践活動の成果をまとめ、これらの学会誌に投稿された場合、それは科学的エビデンスのひとつとなる。しかし、和文での発表の場合、成果に普遍性があったとしても、海外の人の目にふれることがほとんど期待できないため、エビデンスとしての価値は小さいとされる。

Journal of Nutritional Science and Vitaminology (JNSV) は、日本ビタミン学会と日本栄養・食糧学会が共同で編集する英文の科学雑誌であり、日本において数少ない栄養学に関する国際科学雑誌のひとつである。これまで JNSV へ投稿する人の多くは、国内の実験栄養学や臨床栄養に携わる研究者であったが、近年では、栄養

実践活動に関わる研究者からの投稿数も増加している。国際的な評価も高まってきており、JNSVに掲載された論文の科学的エビデンスとしての価値は高いといえる。

6. まとめ：栄養学雑誌の存在意義と目指すもの (上西 一弘)

「栄養学雑誌 (The Japanese Journal of Nutrition and Dietetics) は、日本栄養改善学会の学会誌として、国民の健康増進に寄与するために、栄養学・健康科学と栄養実践活動に関する科学的根拠の蓄積と発信、並びにそのための調査研究の推進に資する論文等の情報を、学会会員及び関連の研究者・実践者に時宜を得て提供することを目的とする。掲載する内容は、依頼原稿も含めて査読審査 (peer-review) により科学的妥当性及び専門領域に

おける価値水準を一定以上とする。」

上記は、栄養学雑誌の投稿規程に記載された、栄養学雑誌の目的と編集方針である。現在の栄養学雑誌の存在意義はここに集約されているといえる。

これからの栄養学雑誌は、これまでの歴史を踏まえながら、本シンポジウムで提案された、今後の取組むべき課題を踏まえて、目的にあった雑誌を目指していく必要がある。具体的には、質の高い論文を、数多く掲載すること、実践活動報告を充実させること、英語論文の掲載、PubMed への収載、WEB 投稿システムへの移行などが、現在の課題、そして目標である。

80巻、100巻とますます有意義なジャーナルとなるように、編集に関わる者はもとより、投稿者の皆様のご協力をお願いしたい。学術雑誌は投稿によって作られるものである。